

本紙268号に「人が見ていない場所でこそ…」と題して、丁婦人の話を掲載しました。彼女は若くして夫に先立たれ、残された四人の子供たちを立派に育て上げています。

その丁婦人が苦しい時や悲しい時に、亡くなった夫、両親の目を常に意識しながら、たくましく日々を過ごしてきたという内容でした。

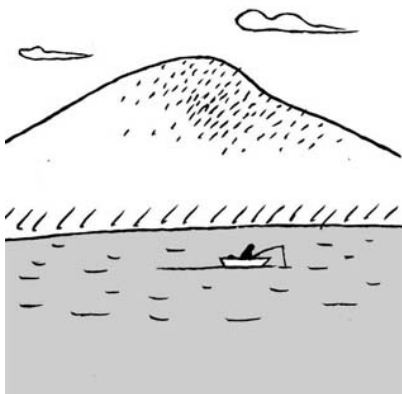
その後、丁婦人の末娘Y子さんが結婚をし、子供に恵まれ、その子育ての中で語りかけてきた言葉がありました。それは「あなたたちのおばあちゃん、学問はなかったかもしれないけれど、人間としては素晴らしい人だったのよ…」というものです。

Y子さんが小学校五年生の時のことでした。当時の生活は楽ではありませんでしたが、そんな中、勧める人がいて自宅で朝の勉強会が始まりました。早朝三時半に起床して布団を上げ、会場を設営し、参加される方々をお待ちします。しかし当初は誰も参加してくれませんでした。そのため母子を中心とした家族だけの勉強の場でした。

ある朝、兄や姉たちが他の会場へ出かけて行き、母と二人だけの勉強会となりました。

お兄ちゃん、お姉ちゃんがいらないから、母はいくら何でも今朝はやらさないだろう。と思っていたところ、「何をグズグズしているの。会場の準備をしなさい」と声をかけられたのです。どうせ誰も来ないのだから…と、Y子さんは進行席と講師席に座布団を敷き、会員席に二枚の座布団を敷きました。

すると母は厳しい声で、「座布団をあるだけ会場に敷きなさい!」と言ったのです。



## 嘘偽りのない実践が 正しき道を拓く

絵・わたなべじゅんじ

それから二人だけの勉強会が始まりました。普段は寡黙で口数の少ない母が、実践報告として三十分以上も話したのです。夫を亡くした後、自分なりに精一杯四人の子供に愛情をかけて取り組んできたという内容でした。「主人を亡くした母親であれば、亡くなった父親の分も子供に愛情を注がなければならぬのに、意気地のない私にはそれができない。四人の子供を導いていく力もなく、ただ子供たちの後からオロオロついていくだけで、何の支えにもなれない。ごめんね…」

そう言っただけをボロボロこぼしたのです。そして四人の子供の名前を呼び、「こんなお母ちゃんです…」と言っただけ、泣きながら話を続けたのでした。Y子さんも母の涙を見て、思わず泣いてしまつたといいます。

彼女は今でも「あの時の母との時間は、神様がくださった私の宝物です。母は人が見ていようと見てまいと、常に一所懸命でした。嘘偽りのない純情（スナオ）な人でした。日本一の母でした」と胸を張ります。

古くからの言葉に「語る人貴し、語ることも知らないで身体語る人さらに貴し。導く人さらにさらに貴し」とあります。自らの一挙手一投足により、私たちは多くの方々を導いていきたいものです。

世の中は意外と誤魔化しのきかぬものです。見る人はきちんと見ているものです。常に今居るところを大切に、日々を生き抜きたいものです。必ずそこに道が拓けるものと信じます。